

野とあけこり

第10号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

古墳時代の秋留台地

合田 芳正

(中央大学文学部兼任講師)

はじめに

古墳時代は、水稻農耕が取り入れられ、階層的な社会を形成してきた弥生時代を母胎に、3世紀後半に始まり、7世紀まで継続した時代です。

畿内を中心に、東北地方から南九州地方にまで広く前方後円墳を中心とする古墳が造営され、それをメルクマールとして古墳時代と名付けられました。

日本列島では本格的な国家形成に向けて政治的・社会的秩序が整備され、やがて7世紀後半には中国(唐)の制度を参考にして、律令制(律は刑法、令は行政法などの諸法)が導入され、それを国の基本とする奈良時代(8世紀)へと進んでいった時代です。

それとともに、中国・朝鮮半島の東アジア社会の流動的な変動ともなって、政治・経済・文化・軍事・人的交流が大きく拡大した時代でもあります。

弥生時代にも、中国・朝鮮半島との深い交流がありましたが、それにも増してお互いの往来が頻繁となり、大勢の人々(渡来人)もやってきました。

そして、古墳時代を通じて、複雑な東アジア情勢を反映しながら、列島内の様子も変化していくのです。

古墳時代は、大きく前期・中期・後期に分けられています。一般的には、前期が3世紀後半から4世紀代、中期が5世紀、後期が6世紀～7世紀とされています。7世紀代を終末期と呼ぶこともあります。

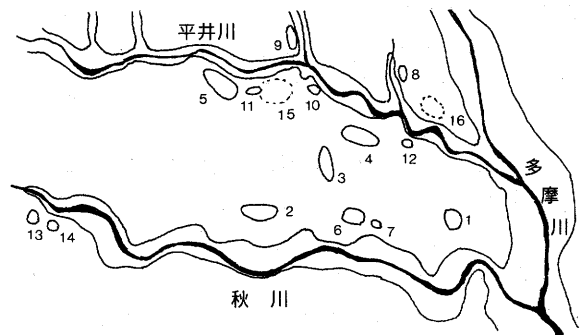
秋留台地の古墳時代には、前期と後期の遺跡がありますが、今のところ中期の遺跡は知られていません。

古墳時代前期

前期の遺跡には、前田耕地遺跡(1)、代継・富士見台遺跡(2)、余田遺跡(3)、石神遺跡(4)、三吉野遺跡群(5)などが調査されています(第1図)。いずれも3世紀後半から4世紀中頃の間に営まれていました。

この頃の南関東地方には、在地の土器とともに、東海地方西部(濃尾平野)系統の土器を主として、北陸・近江系など各地の土器が見られ、少し遅れて畿内系の土器が出てきます。土器が地域を超えて移動しているのです。あるいは、ある地方の土器の形や作り方などの特徴を、その土地の人が模倣しているのです。

土器はどの時期でも動いているのですが、この時期前後には、全国的な規模で土器の移動がとくに活発に見られるのです。土器が勝手に動くはずはないので、その背景には、人の移動・交流が広範囲に頻繁であったことが考えられ、古墳時代開始期の社会の慌ただしい状況を物



第1図 遺跡分布略図

語っているのです。

秋留台地でも、東海系・畿内系の土器が出土しています。土器には壺・甕・高坏・器台・（小型壺）などがあります（第2図）。とくに余田遺跡出土の口縁部の断面形がS字形になっている甕（第2図右）などは東海系土器の代表的なものです。



第2図 前期の土器

このような、全国的な動静の中で、当時無人の秋留台地へ進出して開発に向かった人々がいました。

彼らは竪穴住居を住まいとしていました。竪穴住居は東国では縄文時代から平安時代まで、平面形や屋内設備を変えながら続きます。

屋内には炉が設けられ、日常生活に必要な道具が揃えられていました。考古学的には腐らない土器や石器・鉄器などしか分かりませんが、布・皮・木製品などの品々も用いられていたことはいまでもありません。

このような竪穴住居が数軒集まって一つのまとまりをなしていました。それは日常生活や農作業を行うまとまりです。そして、そうしたまとまりがいくつも集まってムラをつくっていました。ムラの範囲は遺跡によって異なりますが、代継・富士見台、余田、石神遺跡などではかなり大きな規模が想定されます。

さらに、それらのムラムラが、結び付いてより大きな地域社会を形作っていたものと考えられます。

代継・富士見台遺跡では竪穴住居以外に小規模な掘立柱建物が見つっています。この掘立柱建物はクラと考えられます。クラには収穫された穀物などが収められていたものと思われます。

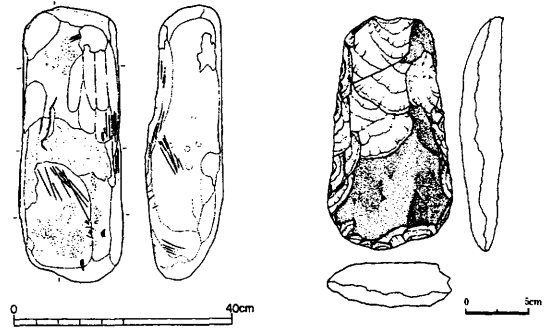
代継・富士見台遺跡や余田遺跡ではイネ・ムギ・ヒエ・アワ・キビなどの穀類やアズキの仲間などが確認されています。米や雑穀類の栽培が行われていたのです。

農業生産に大きな力を発揮した道具に鉄製品があります。代継・富士見台遺跡では鎌が出土しています。

秋留台地では、鉄製農具の具体的資料はまだ少ないのですが、鉄の道具を研ぐための砥石がかなりの量で出土しています。とくに、余田遺跡で発見された超大型の砥石（第3図左）は抜きん出た大きさのものです。

砥石には、大小さまざまな道具を研いだ跡があり、鉄製品がある程度普及していたものと思われます。

その一方で、代継・富士見台遺跡では畑作用とされる石鍬（第3図右）が発見されていて、農作業の内容によっては石器も用いられていたことが分かります。



第3図 前期の石器

ムラにはムラを運営・統率する有力者がおり、彼らは農業生産にともなう様々な作業の指導や、農事暦の節々で豊かな実りを願うマツリを司ったり、ムラ内外のさまざまな揉め事の調停を行ない、またムラを代表して他のムラとの交渉にあたりたりしたと推定されます。

そうした人とその家族が葬られた墓に方（円）形周溝墓があります。石神遺跡ではムラの外れに3基の方形周溝墓と1基の円形周溝墓が調査され、ムラとその近くに墓地を営んでいたことが分かりました。これは、この時期の一般的なムラの在り方です。

この時期以降、畿内を中心に全国に前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳などの古墳が造営されます。

多摩川流域では、下流右岸に川崎市白山古墳（全長87m）が、同左岸に大田区宝萊山古墳（全長97m）などの南関東でも有数の大型前方後円墳が造られました。

白山古墳では三角縁神獣鏡を含む鏡5面、刀・剣・鎌などの武器、鉄製農具、玉が副葬されていました。

宝萊山古墳では鏡や刀剣、硬玉製勾玉、ガラス製丸玉・小玉、きれいな深緑色の碧玉で作られた管玉、碧玉製の紡錘車の形をした石製品が副葬されていました。

墓に前方後円墳という形を採用したこととともに、副葬された品々の組合せは大和政権と深い関係をもつものと考えられています。大和政権を中心とする全国的な政治秩序に列し、東京湾西岸を拠点にした豪族が現れたのです。彼らの覇権の及んだ範囲は不明ですが、多摩川流域を含む南武蔵を支配圏にしたことは十分考えられます。

多摩川上流域では前期古墳は発見されていませんが、

秋留台地の開発に向かった人々の動きは、こうした地方勢力の台頭という社会情勢と無関係ではないと思います。

このような前方後円墳に葬られた人は、方形周溝墓に葬られた人たちよりも上位の階層の人たちです。

おそらく、石神遺跡の方形周溝墓に葬られた人は、秋留台地地域の利害を代表して、こうした有力な地方豪族とも接触をもっていたものと思われる。

古墳時代後期

古墳時代を代表する前方後円墳は、遅くとも7世紀初めまでには全国的に消失するのですが、7世紀代には円墳を中心に各地でまだ古墳が造られ続けます。

一方で、7世紀代には奈良県飛鳥地方を中心にして、6世紀に伝来していた仏教文化が栄え、飛鳥寺・法隆寺などが建立され、地方でも有力豪族のもとに寺院建築が開始されるようになります。

この時期、日本は国内外で大きな歴史的出来事を経験しました。聖徳太子の治世、遣隋使(607)・遣唐使(630～)の派遣による中国の制度・思想・文化の摂取、大化改新(645)による地方行政組織の整備や戸籍の作成・班田收受の法・税制(租庸調)の整備、阿倍比羅夫の蝦夷遠征(658)、朝鮮半島の白村江における唐・新羅連合軍との戦いでの敗走(663)、古代最大の内乱とされる壬申の乱(672)で勝利した天武天皇の中央集権的国家建設の推進などです。

7世紀代に起きたこれらの国家的規模の出来事の影響は、中央・地方行政の整備を通じて、当然ながら東国のムラにまで色濃く反映します。

古墳時代前期のムラが廃れて、再び秋留台地に人々が生活を営むようになるのは古墳時代後期でも6世紀後半になってからです。

『日本書紀』安閑天皇元年(534年)条には、武蔵国造(くにのみやつこ=地方豪族)の地位を巡る争いの記事があり、その内紛に朝廷が関与して、武蔵国内の4箇所に「屯倉(みやけ)」(朝廷の直轄地)が設けられたことが記されています。その中に「多氷屯倉」という表記があり「多摩屯倉」と考えられています。記事の信憑性を含めて多くの議論がありますが、多摩地域の古墳時代後期の歴史を考える上で無視できない重要な意味を持っています。

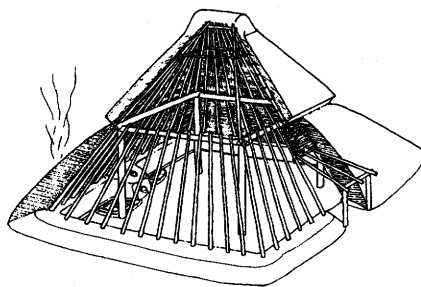
この事件との具体的な関係は分かりませんが、少し経って秋留台地でもムラが営まれるようになりました。

調査された主な遺跡には、雨間地区遺跡群(6)、宮ヶ谷戸遺跡(7)、代継・富士見台遺跡、三吉野遺跡群、石

神遺跡、橋場遺跡(8)、菅生第三遺跡(9)、新道通遺跡(10)、天神前遺跡(11)、松海道遺跡(12)、網代門口遺跡(13)、坪松B遺跡(14)などがあり(第1図)、他にも数多くの遺跡が知られています。

これらの遺跡は、いずれも6世紀後半から7世紀にかけてのもので、途中で廃れたムラや、奈良・平安時代に継続するムラもあります。

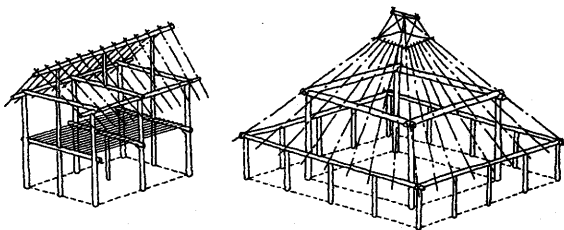
彼らの住まいも竪穴住居ですが、屋内生活の中心施設は炉から竈へと移っていました(第4図)。竈には甕や甑が掛けられて、穀物が煮炊きされていました。竈の脇には貯蔵穴が設けられ、台所となっていました。



第4図 竪穴住居復元図(宮本長二郎氏による)

これらは基本的には一般農民の住まいですが、同じ竪穴住居跡でも、宮ヶ谷戸遺跡では6世紀後半頃の一辺約12m、面積約130㎡にも及ぶ、全国的に見ても有数の超大型竪穴住居跡が調査されています。おそらく、ムラの有力者の住まいだったのだと思います。

代継・富士見台遺跡では、竪穴住居跡以外に掘立柱建物跡が調査されました。その中にはクラ(第5図左)とともに、特殊な構造をもつ掘立柱建物跡や大型の平地式住居(第5図右)もありました。これも7世紀中頃の有力者の住まいと考えられます。



第5図 掘立柱建物復元図(宮本長二郎氏による)

人々の主要な生業は、やはり農業生産ですが、この時期の秋留台地の歴史を考える上で、重要な生業の一つに

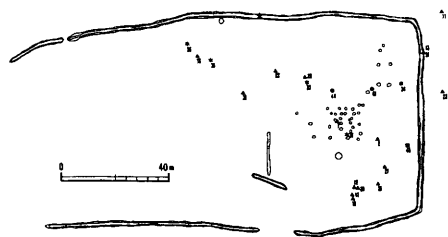
馬の生産があります。日本での馬匹生産は5世紀に乘馬の風習が朝鮮半島から伝わるとともに開始されていました。

秋留台地は、後の武蔵国多摩郡小川郷にあたりますが、平安時代に朝廷の馬を飼養する「御牧(みまき)」に選定された「小川牧」と考えられています。

いきなり、官の牧場に指定されるとは考えにくいので、その前史として、古くから馬の飼育が行われ、良馬を生産していた実績があったことが想像されます。

秋留台地は、東を多摩川、南を秋川、北を平井川、西を険しい山地に囲われた地形で、二宮神社前の湧水池に代表されるように湧き水も豊富です。つまり、自然の放牧場(牧)としての条件を備えていると思うのです。

雨間地区遺跡群と三吉野遺跡群では馬囲いの遺構と推定されている溝の区画が確認されています(第6図)。放牧された馬を追い込んで一箇所を集める施設で、溝に沿って柵を設けていたとする想定もあります。



第6図 雨間地区遺跡群の溝区画

『万葉集』巻14-3537に「柵(くへ)越しに麥(むぎ)食(は)む小馬のはつはつに相見しらしあやに愛(かな)しも」という歌が詠まれています。小馬が柵越しに麦をほんの少し噛むように、ちらっと逢ったあの子が何ともいえず、いとしくてならない(岩波書店『日本古典文学大系』6)、という意だそうです。柵越しに子馬が麦を食べているといった微笑ましい牧歌的光景が秋留台地でも見られたかもしれません。

雨間地区遺跡群は6世紀後半、三吉野遺跡群は7世紀末から8世紀前葉と考えられています。おそらく、秋留台地での馬の生産は6世紀後半以降、連続と続けられていた可能性が高いものと考えられます。

また、代継・富士見台遺跡では、2箇所の小鍛冶遺構が調査されました。そこではムラ内外の需要にともなう鉄製品の生産・修理が行われたことと思われます。

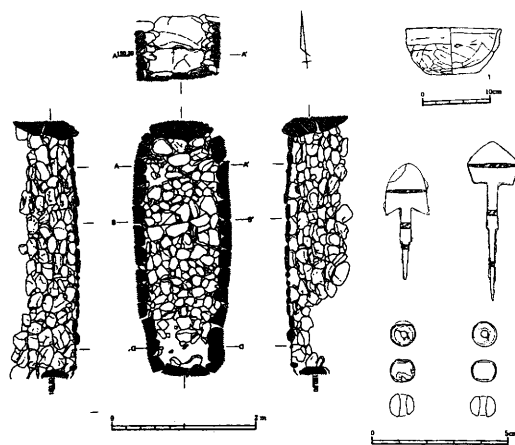
鉄製品には、鎌・鍬・馬具・刀子(ナイフ)・槍鉋など多様なものがあります。前期を上回る数の砥石もあり、鉄の道具が広く普及していたことが知られます。

後期になると、多摩川上流域でも各所で古墳が造営されるようになります。この時期の古墳は群集しており、葬られる人々の階層が、前・中期古墳よりも拡大していたと考えられています。

秋留台地でも、瀬戸岡古墳群(15)・草花古墳群(16)など平井川流域を中心に数多く造営されるようになります。

瀬戸岡古墳群は、約50基の古墳があり、古くから断片的な調査が行われています。

近年調査された30号墳(第7図)では、横穴式石室の墓道に鎌・玉・土器が副葬されていて、7世紀中頃と考えられています。他の古墳からも刀や鍬などの武器・須恵器(本格的な窯で焼かれた硬くて灰色の焼物)などの副葬品が知られています。



第7図 瀬戸岡第30号墳

これらの古墳は、秋留台地(小川郷)を本貫地としてこの地を支配した有力者たちの墓です。

その中には、やがて律令制に向けて整備されつつあった地方行政に携わる地方官(役)人に採用された人もいたものと想像されます。

そして、全国的に律令制という国家秩序に編成されていき、古墳の形・大きさや副葬品によって身分を表す時代が終わりを迎えるのです。

秋留台地の古墳時代について、これまでの調査成果をもとに推測を混じえて述べてきましたが、まだ分からないことも多いのです。これからの調査・研究によってさらに検証を加えて、地域の歴史をより具体的に復元し、日本史の文脈の中に位置付けていく必要があります。

そのためには、秋留台地に残された遺跡の保護と綿密な発掘調査を行うことが大切なことだと思います。